

ビター・スウィート・サンバ（中編）

吉澤 稔雄



深夜、ラジオに繋いだイヤフォンから（ビター・スウィート・サンバ）の軽快なメロディーが聞こえてきて、啓司は英語の問題集から目上げた。思わず欠伸が出た。時計を見て午前一時になったのを確認すると、足元の鞆からセブンスターのパッケージを取り出し、その空いた口から一本の煙草を抜き出して火を点けた。

啓司はゆつくりと恐る恐る煙を吸い込んだ。煙を一旦口に溜め、鼻から空気を吸い込んで、そしてゆつくりと口の中の煙を吐き出した。

「煙草なんか、やめておきなさい」と静香が真顔で言ったのを思い出した。その一方で、職場のおばさんたちの中には、「一人前の男なら煙草ぐらい吸いなさいよ」と自分の煙草を差し出して勧める人もいた。

一応、未成年者の喫煙は法律で禁じられていて、世間では誰もが承知していながら、それが犯罪だとは認識していなかった。中学生や高校生が煙草を吸えば補導されることはあっても、高校を卒業してしまえば、二十歳まではグレイ・ゾーンで、その年頃になれば取り立てて喫煙が問題視されることもなかったのである。

思えばその年の春の入試の試験会場の大学では必ず喫煙所が設けられていた。喫煙所とは言っても、一斗缶に水を入れただけのもので、それがいくつもキャンパスの隅や校舎内の廊下に置かれていたのである。試験前や終了後はもちろん、休憩時間ともなると、多くの受験生たちがその一斗缶の周囲に集まってきては一斉に煙草に火を点けた。大勢が一斉に煙草を吸うものだから、たちまち周囲にはもうもうと白煙が立ち込めた。

そんな光景を思い出しながら煙草を吹かしていると、啓司は自分が今大人の社会の入口に立っているのだと思った。まだ決して一人前とは言えないが、会社勤めをしている今の自分を思えば、なおさらそんな気にもなっていた。

静香は、しかし、そんな啓司を時に子供扱いすることがあった。早生まれだったから啓司より学年がひとつ上で、したがって社会に出たのも一年早かった所為だろう。

ある時、啓司は静香に乞われて買い物に付き合うことになった。連れて行かれたのは上野広小路角のデパート、松坂屋だった。何の売り場

に行くのかも聞かずに黙って静香について行くくと、着いた先は下着売り場だった。啓司は不意に気まずい思いを感じて静香から離れ、通路の端に立ち止まって別の売り場の方に目を向けた。何とも居心地がわるかった。

勤め帰りの時間帯で、デパート内の買い物客は多くはなく、下着売り場のフロアは閑散としていた。そこに自分のような若い男がポツンと立っていたら、かなり目立つのではないかと啓司は思った。助けを求めるような気持で啓司は静香の方を振り返った。静香は若い女の店員と何やら話をしていた。話が終わると女店員は静香の前から立ち去り、ほどなくして商品をいくつか持って来ると、それらをカウンター・テーブルの上に置いた。ブラジャーだった。静香はそのうちの一つを手にとると、それを広げて自分の胸にあてた。

「啓司くん、ちょっと」

静香が啓司の方を振り返って手招きするので、啓司は渋々静香の方に近づいて行った。

「これ、どうかしら？」

静香は着ていたブラウスの上にグレーのレース地のブラジャーをあて、胸を突き出すようにして啓司に尋ねた。

あらためてよく見ると大きな胸だった。Dカ

ップ？ それともEカップ？ 身体は痩せているのに、確かに胸の膨らみは豊かさに満ちていた。「あいつはポパイの恋人のオリーヴ・オイルみたいにガリガリのくせに、おっぱいはデケェんだよ」と、一年先輩の運送課の長谷川さんが、何かの話の折に言っていたのを啓司は思い出した。

「どうって……。わかんないよ」

啓司は、俯き加減になって、頭を掻きながら応えた。応えながら、自分でも顔が火照っているのがわかった。顔を上げると、笑いを堪えている女店員と目が合ってしまった。啓司は消え入りたいような思いで静香からそっと離れ、再び通路の端に立った。

三島由紀夫の『豊饒の海』第三巻『暁の寺』の中に、俗物のドイツ文学者の今西が情事に赴く途中の街中の道端で黒いレースの巨大なブラジャーを拾い、一緒に歩いていた情人の椿原夫人にひどく叱られる場面があった。啓司はそれを思い出していた。そのブラジャーの描写が妙に艶めかしく、強烈な印象を啓司にもたらした。それは発売後間もない単行本で、啓司はつい最近その本を読んだばかりだったのだ。

しばらくして買い物済ませた静香が啓司のところに来て声をかけた。

「ごめんね、待たせちゃって」
啓司は「うん」と応えながら、静香の顔を見た。

「俺、ちょっとさ、恥ずかしかったよ」

「そうか、子供にはちよつと刺激が強すぎたかしらね」

静香はからかうようにそう言うと、さもおかしそうに笑った。

啓司は急に静香に背を向けると数歩歩いて振り返り、あかんべえをして足早にエスカレーターの方に向かって歩いて行った。後ろから静香が小走りで追ってくるのがわかった。

……イヤフォンからアストラッド・ジルベルトの〈The Shadow of Your Smile〉が聞こえてきた。その物憂く囁くような歌声に啓司はしばし聞き入った。

煙草の火を揉み消すと、啓司は再び英語の問題集に取り掛かった。

日暮里の駄菓子問屋街については啓司も人から聞いて知ってはいた。しかし、実際にそこに行ったことはなく、それがどんな街並みなのかは想像するしかなかったが、そのイメージは容易に描くことはできた。けっして華やかな商

店街でないことはわかりきっていた。

古いくすんだ家々が密集して建ち並ぶ狭い路地。多くは木造モルタルの二階建てで、一階は店舗、二階が住居になっている。一階の入口には日除け雨除け用のテント地の大きな庇が路地に張り出し、その入口付近から薄暗い店内にかけて種々の駄菓子詰められた段ボール箱が所狭しと積み重ねられている。闇市というものを啓司は直接見たことはなかったが、何処となく如何わしい品物を並べて売っているところから、駄菓子問屋街もまた闇市同様の怪しげな雰囲気を漂わせているのではないかと啓司は想像していた。

間もなく梅雨も明けようかという七月の半ば過ぎ、啓司は初めて日暮里のその駄菓子問屋街を訪れた。

その前日から二日続けて、静香が会社を休んだのだ。もちろん、静香から会社には連絡があったはずである。しかし、啓司にはその理由を知る術はなかった。二日も続けて休むとは、いったい何があったのか。

静香は至って健康そうだったし、何か持病があるとも聞いていなかった。それなら怪我でもしたというのか？ あるいは同居する両親のいずれかに何かがあったのか？ いずれにし

ても、啓司は静香の身の上に何があったのかと気になって仕方がなかった。しかし、静香の家に電話をしようにも、その電話番号を啓司は聞いてはおらず、連絡の取りようはなかった。

そこで、啓司はとにかく駄菓子問屋街に行ってみるしかないと考え、定時になるとすぐに会社を後にして日暮里へと向かったのだ。

日暮里駅の東口に降り立つと、駅前には狭いロタリーがあり、そのすぐ脇に古びた家々の密集した一画が見えた。そこが駄菓子問屋街だろうと見当をつけ、啓司はその方角に歩いて行った。

夕刻の六時過ぎとはいえ、七月の空はまだ明るく、問屋街の古びた家並みは強い西日に照らされていた。しかし、陽の当らぬ狭い路地に足を踏み入れると、そこには人影もほとんどなく、ある種の寂寥感のような空気が漂っていた。店はあらかた閉まっていた。

ここが静香の住んでいる街なのかと思いがら、啓司は静まり返った路地をゆっくりと歩いた。しかし、啓司はふと静香の家の屋号を知らないことに思い至った。姓が森だから単純に「森商店」なのか、それとも「多びす屋」のよいうな特別な屋号がついているのか。小さな建物の密集した街区で、玄関のない家が多く、表札

のかかっている家もあった。

結局、路地を一巡しても静香の家はわからなかった。偶然会えるかもしれないの淡い期待も空しく消えた。啓司はすっかり落胆して家路についた。

その翌日、静香はいつもどおり出社していた。朝、啓司がタイム・カードに打刻するために工場一階の事務所立ち寄ると、静香は何事もなかったかのように「おはよう」と言って、啓司に微笑みかけた。いつものチャーミングな笑顔だった。啓司はそれを見て安堵した。立てた親指を突き出して、啓司は微笑みながら「おはよう」と言葉を返した。

静香が二日も続けて会社を休んだのは何故だったのか——それを知りたいのはやまやまだったが、その答えを静香から得るには夕方の定時後まで待たなければならなかった。

五時半の終業のチャイムが鳴ったところで、啓司は早々に片付けをして着替えを済ませ、工場を出ると、本社ビルの先にある台東図書館へと向かった。図書館に着いて、入口でしばらく待っていると、直に静香が小走りやって来た。目と目が合って互いの顔に笑みがこぼれた。

「二日も続けて休むなんて、何があったのさ？」すかさず啓司が尋ねた。「心配していたんだ

ぞ」と言葉継ぐと、静香は笑いを堪えるような顔つきでまじまじと啓司の顔を見つめた。そして程なくして、アツハツハツハと静香の口から笑い声が爆ぜた。

「ほんとに心配してくれてたの？」

「そりゃあ当たり前だろ」

「……あのさ、啓司くん、生理ってわかる？」

「セイリ？ 何だよ、急にそんな話を持ち出したりして」

啓司は少し動揺した。静香の口からそんな生々しい言葉を聞こうとは思ってもいなかったからである。

「……整理整頓か？」

啓司は咄嗟にそうはぐらかした。

「バカね。知ってるくせに。月経のことよ」

静香は呆れたような顔で啓司の方を見た。

「あたしも女だからね、月よりの使者が毎月あたしのところにも来るわけよ」

「それは知ってるよ」

「でもさ、啓司くんは知識として知っているだけでしょ？」

「まあね。男には体験のしようもないことだからね」

「それはそうよね。あたしね、あれが来ると痛みがひどいのよ。お腹がキリキリ締め付けられ

るように痛くなるの。それがずっと続くの。今回は特にひどかったみたい」

その所為で二日も休むことになってしまったのだと静香は言った。

「それで、もう大丈夫なの？」

啓司は尋ねた。

「ううん、だいぶ収まってきたけど、まだちょっとね……」

「まだ痛いなの？」

「うん、ちよつとね。でも、痛み止めの薬が効

いてきたみたいだから、もう大丈夫」

静香はそう言って啓司に微笑みかけた。

二人は、それから春日通りに出て、御徒町駅

の方に向かって歩いて行った。

駅に着いて改札口の脇に立ち止まると、二人

は互いに顔を見合わせた。静香が首を少し傾げ

た。啓司はそんな静香の様子を見て無言で改札

口を離れた。静香が後をついて来るのを確認す

ると、啓司は線路沿いの道を北に進み、摩利支

天へと向かった。

通称摩利支天、徳大寺というその寺の入口の

石段先に「宮殿」という名の古めかしい喫茶店

があった。二人はそこに入り、コーヒーを飲み

ながら、しばらく取り留めのない話をして過ご

した。

その後、電車に乗って日暮里まで一緒に帰ったが、啓司は前日に駄菓子問屋街に行ったことは静香には言わなかった。

梅雨が明けるといよいよ本格的な夏の訪れだ。陽射しは一際強くなって、気温もグンと上がってきた。それを待っていたかのようにアブラゼミが続々と地中から這い出してきて羽化し、公園の木立や歩道の並木でも騒がしく鳴き始めた。

佐野商会では毎年八月の第一土曜日に暑気払いと称して飲み会を行うことになっていた。仕事を一時間早めに切り上げて、工場二階の作業場に社員のほぼ全員が集まり、ささやかなパーティーを開くのだ。

この日、午後になってから、営業と総務の事務の女子社員たちはつまみの珍味や菓子などを調達しに出かけた。営業事務の静香は、御徒町駅近くの菓子問屋、チリチリ・パーマの林家三平のコマーシャルで有名な「二木の菓子」に行くのだと啓司には話していた。総務の方では、鳥越のおかず横丁に行って、惣菜類を買って、定時の一時間前、午後四時半になったところ

で、製造課の佐野係長が臨時のチャイムを鳴らした。そこで作業は中止となり、社員たちは作業台の片づけに取り掛かった。

片づけが済むと、営業と総務の女子社員たちが菓子や惣菜などを持って現れ、パーティーの準備を始めた。酒のつまみの珍味や菓子、惣菜が作業台の上にとざらりと並べられ、人数分の紙皿と紙コップ、割り箸が置かれた。

佐野社長が作業場に現れると、直に酒屋から冷えたビールや日本酒も届けられた。準備は整った。

佐野係長があらためてチャイムを鳴らすと、社員全員が作業場に集まって、暑気払いのパーティーが始まった。

まず初めに佐野社長の挨拶があり、次いで製造課の伊藤課長が乾杯の音頭を取った。その発声に合わせ、皆はそれぞれビールの入った紙コップを翳すようにして「乾杯」と唱和した。

啓司が最初の一杯を飲み干すと、すぐ右隣にいた最少の百合ちゃんがすかさず目の前のビール瓶を掴むと、それを啓司に差し向けた。

百合ちゃんは福島出身で、中学卒業後すぐに上京し、佐野商会に入ったという。だから、啓司より一〜二歳は年下のはずだった。現在は本社ビルにある社長の住居に同居させてもらっ

ているという話だった。

啓司が百合ちゃんの注いでくれたビールを半分ほど飲んだところで、次に総務の脇坂さんが啓司の前にやって来た。営業と総務で合わせて四人いる事務員の中で、脇坂さんは筆頭格と思しき人物だった。

「富沢君、案外いけそうね」

にこやかにそう言うと、脇坂さんは作業台越しにビール瓶を差し出した。

「いえいえ、たぶんそんなに飲める方ではないですよ」

啓司はそう応えながら紙コップを差し出し、脇坂さんのお酌を受けた。実際、経験不足で、まだ自分の限度がまったくわかっていなかったのだ。

脇坂さんが立ち去るや、今度は製造課の山本さんがスツと啓司の脇にやって来た。

そんな風に女子社員たちが入れ代わり立ち代わり、次から次とやって来ては、啓司にビールを勧めるのだった。啓司は戸惑いながらも、失礼のないよう彼女たちのお酌を受けた。

その様子を見ていた運送課の山田さんがニヤニヤしながら近づいてきて言った。

「富沢君、えらいモテようやね。ワシもあやかりたいなあ」

山田さんは、越中富山の出身とのことだったが、高校卒業後は十年近く大阪で暮らしていたらしい。

「あー、無理、無理。あたしが注いでやるからさ、コップ出しな」

パート社員の須賀さんがそう言って山田さんにビール瓶を差し向けた。

「なんや、きついこと言うなあ、このおぼはんは」

山田さんは、ヘラヘラ笑いながら、言われるままに紙コップを差し出した。

「でも、ワシはやっぱ若い娘のお酌の方がええなあ」

「何言ってるんだ、このトンチキが！」

下町のおばさんらしく、須賀さんは小気味よい口調でそうやり返した。

そこへ静香がやって来た。

「啓司くん、無理して飲まない方がいいよ」

静香は気遣わしそうに言った。

「うん、みんな次々勧めに来るもんだから、つい調子に乗って……」

「わかってる。でも、飲むならゆっくりね」

静香はそう言って啓司を窘めた。

「ねえねえ、あんたたち、できてんの？」

突然、須賀さんがそう言って二人の会話に割

り込んできた。率直で直截なそんな物言いに啓司も静香も一瞬驚いて、二人同時に須賀さんの顔を見た。

「いえね、この前さ、富沢君とシズちゃんがかちの前を仲良く肩を並べて通り過ぎるのを見ちゃったのよ」

須賀さんは小島町に住んでいた。春日通りの一本手前の裏道、小島小学校のすぐ近くに家があり、水道工事をやっていた。御徒町駅に行く途中、二人がその道を何度か通ったことがあるのは事実だった。

「あーら、見てたのねえ」

静香は、咄嗟に都はるみの歌の一節を歌って、須賀さんの軽口をいなした。須賀さんは一瞬顔をしかめたが、それ以上の追及はしなかった。

パーティーは七時過ぎにはお開きとなった。まだ飲み足りない男たちは、その後二次会に行くらしく、会社を出るといくつかのグループに分かれて、直に夜の街に消えていった。

啓司は女たちに混じって作業場の片づけに加わった。人数が多かったから、片づけが終わるのも早かった。

片づけを終えると、啓司は静香と連れ立って会社を後にした。酔って汗ばんだ身体に夏の夜風が心地よかった。

「啓司くん、大丈夫なの？」

御徒町駅に向かう道の途中で静香は心配そうに尋ねた。

「うーん、だいじようぶ……だと思っよ。ほろ酔い加減でいい気持ちだ」

そう言うと啓司はショルダー・バッグから煙草のパッケージを取り出し、一本抜き出してそれを口に啞えた。ライターで火を点けようとしたとき、静香が慌てて啓司を制した。

「啓司くん、反対だよ、反対！」

啓司は訳が分からず、きよとんとして静香の顔を見つめた。

「あのね、啞えるところが反対なの。フィルターに火を点けてどうするのよ？」

そう言われて、啓司は啞えていた煙草を手にとり取って確かめた。そして、「おっ！」と驚きの声を上げた。確かに指に挟まれた煙草の吸い口が逆になっていた。

啓司は声を上げて笑った。釣られて静香も大きな声で笑った。

「啓司くん、ほんとに大丈夫なの？」

「だいじようぶ、だいじようぶ……」

「だいじようぶ、だいじようぶって、それはね、酔っ払いの常套句よ」

「うん。でも、俺は大丈夫だって」

そう言うと、啓司は立ち止まり、手にしていた煙草の吸い口を確認して、あらためてそれを啞えて火を点けた。一瞬ライターの火がすぐ近くにいた静香の顔をほの白く浮かび上がらせた。その顔は微かに笑みを湛えているように見えた。啓司の脳裏にアストラッド・ジルベルトの〈The Shadow of Your Smile〉の物憂い歌声が流れた。

八月のお盆休みが近かった。今年は十五日が水曜日だから、会社は十二日の日曜日から十六日の木曜日まで五日連続の休みとなる。

「ねえ、啓司くんはお盆休みはどうするの？」

会社帰りに寄った上野公園の不忍池の畔を歩きながら、静香が尋ねた。

「特に予定はないよ。受験生にお盆休みは関係ない。一に勉強、二に勉強だから」

「そうか……。あたしね、湯河原に行くんだ」

「湯河原？」

「そう。おばあちゃんがね、湯河原に住んでいるの。山の斜面の蜜柑畑の中に家があつてね、そこから相模湾が一望できるの。とってもいい所よ」

静香は毎年夏休みには湯河原の祖母の家に

行き、数日をそこで過ごすことにしているのだと話した。

青い海を見渡す山の中の蜜柑畑に囲まれた家——啓司は静香の話した湯河原の風光明媚な景色を想像してみた。そんな田舎のある静香を啓司は羨ましく思った。

啓司には田舎がなかった。父も母もともに東京生まれの東京育ちだし、それぞれの祖父母も東京で暮らしている。だから、夏休みになっても何処にも行くあてなどなかったのだ。そうかと言って、家族で泊りがけの旅行に行けるほどの余裕もなかった。旅行と言えば、啓司が小学生だった頃、日帰りで千葉の幕張や稲毛辺りに家族全員で海水浴に行った記憶はあったが、それとて毎年というわけではなかった。中学生になつてからは、家族で小旅行に行くこともなくなった。

「湯河原へはシズちゃん一人で行くの？」

啓司は尋ねた。

「行きはお母さんと二人。でも、帰りはあたし一人よ。お母さんは一泊したら次の日には東京に帰ることになっているの」

湯河原のおばあちゃんは、静香の母方の祖母なのだという。だから、父親は湯河原にはあまり行きたがらないらしい。日帰りならまだ

しも、泊りがけとなると、なおさら気兼ねするところもあったのだろう。

「お父さんはね、たまには家に一人でいるのもいいって言うんだけど、炊事がまったくできないから、お母さんは放っておけないのよ」

「それで一晩だけ泊まって次の日には帰るってわけか」

「そう。放っておくとお父さんはお酒ばかり飲んじゃうから」

「だから、余計放っておけないんだね」

静香は小さく頷いて笑った。

二人は弁天堂の島を抜け、山の上に出て上野駅の方に向かった。

「あたしね、日曜日に出発して、木曜日に帰って来るね。その間、啓司くんはちゃんと勉強しとくのよ」

駅に着いて電車に乗ったところで、静香は子供に言い聞かすように言った。

「わかってるよ」

啓司は少し不貞腐れたように応えた。

「金曜日には出勤するから、また金曜日には会えるよね」

日暮里の駅で別れ際に静香はそう言った。啓司は頷いた。そして軽く手を振って静香を見送った。

啓司はこうして社会人一年目の夏休みを迎えることになった。それにしても、たった五日の夏休み。四十日ほどの休みのあった学生時代とは大違いだと啓司はあらためて思った。

夏休みの五日間を啓司はひたすら本を読むで過ごした。スタンダールの『赤と黒』、ペンギン・クラシックスの英語版である。何年か前に日本語版を読んでいたから、辞書なしでも話の筋を追うのは容易だった。

ラテン語の聖書を暗記していたという主人公ジュリアン・ソレルを真似て、啓司も『赤と黒』の英文を暗記してみた。第一章の冒頭から一ページ、二ページと少しずつ量を増やして頭の中に文章を叩き込んでいき、それを空で暗唱できるようにするのは、啓司にとっては一種の快感であった。

そうして五ページまで暗記したところで短い夏休みは終わった。

休み明けの金曜日、静香は約束通り出勤してきた。啓司は会社の事務所にいつもどおり静香がいるのを見て、何となく安心した。

夕方、啓司が台東図書館の入口前で待っていると、少し遅れてやって来た静香は開口一番に

こう言った。

「啓司くん、夏休み中ちゃんと勉強してた。」
「何だ、いきなりそんな話か。自分はさんざん遊んでいたくせに」

「ただ遊んでいたわけではないわ。あたしだって、おばあちゃんに習って料理の勉強をしていたのよ」

静香は不満そうに言った。

「料理の勉強か」

「そうよ。あたしだってそのうち結婚して主婦になるわけだから、料理くらいできないといけないでしょ。……で、啓司くんは何を勉強してたの？」

「何をもって、英語とか世界史とかさ。きまつてるだろ」

「ほんとに勉強してたの？」

「もちろんさ。疑うのなら、その証拠を見せてやろうか？」

啓司はそう言って、休み中に暗記した『赤と黒』の英文を鼻にかかったアメリカ訛りの発音で誦んじて見せた。

The little town of Verrières is one of the preetiest in Franche-Comté. Its white houses, with their red-tiled, pointed roofs, stretch out

along the side of a hill where clumps of chestnut-trees thrust sturdily upwards at each little bend. Down in the valley the river Doubs flows by some hundreds of feet below fortifications which were built centuries ago by the Spaniards, but have long since fallen into decay……

啓司は、冒頭の一ページを淀みなく誦んじると、そこで一息入れた。静香は目を丸くしてポカンと口を開けて聞いていたが、一段落したところで笑みを浮かべ、拍手した。そばを通りかかった人が二人を怪訝そうに見ながら通り過ぎて行った。

「もっと続けようか？」

啓司は尋ねた。

「うーん、もういいかな。あたし、聞いてもわかんないし。でも、啓司くん、すごいね」

静香はすっかり感心したような口振りで言った。

「いや、ただ暗記しただけだから、大したことじゃないさ」

「暗記したって、どれくらい覚えたの？」

「ちようど五ページ分。スタンダールの『赤と黒』という小説だよ」

しかし、静香はスタンダールを知らなかった。啓司はそのことに少しがっかりした。とはいえ、世の中には生きていく上で文学など必要としない人も多くいるわけで、たぶん静香はそっちの人なのだろうと啓司は思った。そして、そんなことは大した問題ではないのだと啓司は自分に言い聞かせた。

二人は図書館を後にして春日通りに出ると、やがて暮れなずむ街の雑踏に飲まれて消えていった。

九月に入ると、日も少しずつ詰まってきた、それに伴い熱気を孕んでいた空気も徐々に和らいでいった。彼岸が近づいてくると、天気も崩れがちになり、時に雨が降って、啓司の気分を落ち込ませた。

そんなある日の夕方、啓司と静香を乗せた京浜東北線の電車が鶯谷駅に差し掛かろうとした時、静香が窓の外を見ながら啓司に言った。
「あたし、あのクツキング・スクールに行こうかと思ってるんだ」

線路の西の際に一際高いビルがあった。その壁面には〈華クツキングスクール〉の大きな文字のレリーフが取り付けられていた。

「まさか、花嫁修業なんて言うんじゃないだろうね」

啓司は冗談めかしてそう言った。

「さすが啓司くん、察しがいいわね」

静香はうつつすらと微笑を浮かべながら応えた。静香のその言葉を聞いて、啓司は一瞬うろたえた。

「本気かよ？」

「もちろん、本気よ」

鶯谷駅を出た電車は、間もなく日暮里駅に着しようとしていた。啓司は、隣に座っていた静香の手を取ると、それをギュッと握りしめた。本気だと言う静香の答えに対し、啓司には返す言葉がなかった。

電車は徐々にスピードを落として行って日暮里駅のホームに着いた。電車が停止してドアが開くと、静香は席を立ち、ホームに降り立って啓司に手を振った。

ドアが閉まり、電車はゆっくりと動き始めた。ホームに佇んで手を振り続ける静香の姿が次第に小さくなっていった。

……あの時、静香はいったい何を考えていたのだろうか？ 深夜、啓司は勉強机に頬杖をつ

きながら考えた。花嫁修業を本気で考えているというのは、俄かには信じ難かった。静香はまだ十九歳だった。十九でもう結婚を考えているというのか？ 啓司には静香の気持ちがまったく理解できなかった。

まだ十八歳の啓司は、これまで自身の結婚について考えたことなどなかったし、仮に結婚するにしても、それはまだ随分先の話だと漠然と思っていた。少なくとも、今の啓司にとっては、まず大学に入ることが先決の問題だった。結婚するとしたら、大学を卒業して企業に就職し、生活の基盤を固めてからの話でなければならなかった。それならば、十年近く先の話ということになるのか。そう考えると、啓司は思わず深い溜息を衝いた。十年近い歳月が経った時、果たして静香がまだ自分の手の届くところにいるしてくれるのだろうかと思っただけである。その可能性は限りなくゼロに近いように啓司には思われた。

それではどうすればよいのか？ 答えは容易には見つかりそうもなかった。いや、話は案

外簡単なかもしれないと思っただが、それには思い描いている将来の道筋を変更する必要があった。即ち、大学進学を諦め、このまま勤め人になってしまえばよいのだ。……しかし、

そうすることが本当によいのかどうか、啓司には大いに躊躇うところがあった。

そもそも、啓司が会社勤めを始めたのは大学に入るための資金を貯めるためだった。そして、偶々佐野商會に勤めることになったが、そこは啓司には単なる通過点でしかなかった。

佐野商會に勤めるようになってから、すでに半年になる。仕事にはだいぶ慣れてきたが、今のところは単純作業ばかりで、正直その仕事に面白みはまったく感じられなかった。要するに誰にでもできる仕事だった。そんな単調な仕事に耐えてきたのも偏に入学資金を貯めるためだった。だからこそ、ここで大学進学を諦めるわけにはいかなかったのだ。自分の思い描いた将来の道筋をそうそう簡単に変更することなどできるわけがないと啓司は思った。

すると、この先静香とのことはどうすればよいのかという問いが再び脳裏に浮かんでくる。堂々巡りである。結局のところ、成り行きに任せるしかないのではないか。啓司にはそう考えるしかなかった。

そんなふうにあれこれ考え疲れて、啓司は机の上にあつたトランジスター・ラジオのスイッチを入れた。時刻は零時を僅かにまわったところだった。イヤフォンを耳につけると、へミ

スター・ロンリー」の心地よいメロディーが流れてきた。

映画『いちご白書』が公開されたのは九月も末近くになってからのことだった。数年前、アメリカのコロンビア大学で起きた大学紛争の記録をもとに製作された映画で、啓司は日本で公開される以前からこの映画に関心をもっていた。アメリカでは三か月余り前に公開され、これに伴ってバフィー・セント・メリーの歌う主題歌〈ザ・サークル・ゲーム〉がしばしばラジオから流れてくるようになっていたからだ。啓司はこの映画を是非観たいと思っていた。

静香を誘うかどうか、啓司は迷った。大学紛争の映画などに静香が興味をもっているとは思えなかったからである。それに、啓司は一期自分が学生運動に関わっていたことを静香には話したことがなかった。「会社に入ったら左翼的な言動は厳に慎むこと」と高校の担任だった遠藤先生から言い含められていたから、政治的な話題は一切口にしなかったのだ。

ベトナム戦争が泥沼化する中で気運の高まっていた反戦運動と、それに伴う日米安全保障条約改定に反対する動きの先鋭化、そして各大

学の抱えていた問題点を紛争化することで勢いづいた左翼勢力各派の跳梁跋扈——そんな時代の流れは啓司には大きな社会変革のうねりのように感じられたこともあったが、所詮それは学生という限られた年代による時限的なムーヴメントでしかなかった。

啓司自身は、昨年十一月の安保改定協議のための佐藤首相訪米をもって、阻止闘争は敗北に終わったと総括し、それ以後運動から離れた。『いちご白書』はそんな啓司自身の味わった挫折感を表現したような映画だった。

十月に入って間もないある日、啓司は思い切



って静香を誘ってみた。
「次の日曜日に映画を観に行かないか？」
「いいけど、何の映画？」

静香は断らなかった。

「うん、ちよっとね、観たい映画があるんだ」

「そう。それで何という映画なの？」

『いちご白書』っていうんだ」

「あら、素敵なタイトルね」

静香は単純に「いちご」の語感に反応したようだった。

そして次の日曜日、啓司と静香は日暮里駅のホームで待ち合わせて、有楽町のニュー東宝に行った。

館内に入って席に着くと、直に映画が始まった。啓司のすぐ隣に静香がいたが、互いに身体が触れ合うほどの距離に身を置きながら、暗闇の中で会話もなく、ただスクリーンをじっと見つめているというのは、啓司には不思議な感覚だった。

そんな感覚に浸りながら大きな画面に見入っているうちに、啓司は徐々に物語に引き込まれていった。

主人公サイモンのガールフレンドであるリンドを演じた女優キム・ダービーの初々しさが印象的だった。

そして物語の終盤。大学の各校舎に立て籠もっていた学生たちを追い出すために、警察と州兵が導入され、学生たちは次々排除されて講堂に追い詰められていった。講堂では学生たちが非暴力の姿勢を示すために、円陣を組んで床に伏し、単調なリズムで床を手で叩きながら、ジョン・レノンの〈平和を我等に〉を大合唱する場面が映し出された。

この場面で啓司は感極まって、涙が溢れてくるのを抑えることができなかった。隣に座っていた静香が手探りに手を伸ばしてきて、啓司の手を掴んだ。

暫くして、講堂を取り囲んだ警官や州兵は学生たちを排除すべく講堂内に突入し、催涙弾を打ち込み、警棒を振りかざして学生たちに襲いかかった。そんな中、リンダが警棒で殴られ、怪我をした。それを見たサイモンは激怒し、警官隊に跳びかかっていった。

映画は跳びかかるサイモンのストップ・モーションで終わる。エンディング・ロールに合わせてバフィー・セント・メリーの歌う〈ザ・サークル・ゲーム〉が流れ、館内の照明が徐々に明るくなっていった。

館内がすっかり明るくなったところで、啓司は静香の顔を見て笑った。

「シズちゃん、目の縁が黒くなってるよ」

啓司にそう言われて、静香は慌ててハンドバッグから化粧用コンパクトを取り出し、自分の顔を鏡に映して確かめた。涙で溶けたマスカラが目縁に崩れた隈をつくっていた。

「啓司くん、あたし、トイレ行ってくる」

そう言うとき静香は座席から立ち上がり、下を向いたまま通路に出ると、足早に出口のドアの方に向かって歩いて行った。光の射し込むドアの前で一瞬静香の姿が黒い影になった。そしてその影は瞬時に啓司の視界から消えた。

この日、啓司と静香は映画を観た後、その足で銀座五丁目のイエナ書店に行った。洋書専門店で、店はニュー東宝から四丁目の交差点に向かう途中にあった。啓司は以前その店で「IS MAGAZINE」というアメリカのミドル・ティーン向けのポップス関係の薄っぺらい雑誌を買ったことがあった。新宿の紀伊国屋や日本橋の丸善に比べれば小ぢんまりとしていたが、雑誌や絵本を多く取り揃えていることで知られる書店だった。

「ふーん、啓司くんはこんな本屋さんに来ているんだ」

静香は、洋書ばかり並べられた書棚や陳列台を見渡して、感心したように言った。

「うん、時々ね」

「あたし、こんな本屋さんに来たの初めてだわ。啓司くんは、ほんとに学問をする人なんだね」

「いいや、俺なんか、まだその入口にも立っていないよ」

啓司は照れながら応えた。

二人はそれから数寄屋橋の方に戻った。交番前では右翼の赤尾敏が熱弁を振るっているところだった。その様子を一瞥すると、二人はソニー・ビルに入り、階上のティー・ルームに行った。

「あたし、レスカにする」

窓際のテーブル席に向かい合って座ると、静香が言った。

「レスカって、何？」

すかさず啓司が尋ねた。それは初めて耳にする言葉だった。

「あら、レスカを知らないの？ レモン・スカッシュのことよ」

「なあんだ、それなら知っているよ。レスカっていうのか。……じゃあ、俺もレスカにするわ」

そう言って啓司は注文を取りに来たウェイトレスにレモン・スカッシュを二つ頼んだ。

「あたしたち、青春してるね」

「うん、青春してる」

「そう言えば、啓司くん、お誕生日が近いんじゃないかって？」

程なくして運ばれてきたレモン・スカッシュを飲みながら話をしていううちに、静香が急に話題を変えた。

「十月二十七日。来週の土曜日だよ」

「そうか、啓司くんもやつと十九になるんだね」

「そう。やつとシズちゃんと同じ年になる」

「じゃあさ、少し早いけど、誕生日のお祝いしようか？」

「いいね。で、どうするの？」

「お祝いだから、お酒を飲み行こうよ。ねっ、いいでしょ？」

「もちろん、オーケーさ」

そう応えたものの、啓司には銀座界隈で知っている店は皆無だった。少し不安だった。

ティー・ルームを出ると、せっかく銀座に来たのだから、銀ブラしようということになった。夕暮れまではまだ少し時間があつた。啓司は街を散策しながら、酒の飲める店を探すつもりでいた。

鈴らん通り、みゆき通り、ガス灯通りと二人は気ままに歩いてみた。しかし、周囲は高いビ

ルばかりで、年若い二人が気軽に入れそうな店は一向に見当たらなかった。

「だめだ、シズちゃん。何処に行ったら酒の飲める店があるのか、まったくわからないよ」

啓司は遂に音を上げた。

「そうね。あたしにもまったくわからないわ。場所を変えようか？」

静香も、多少困惑したような様子で、そう応えた。

「うん、上野に行こう。上野ならどの辺に行けばいいのかわかる」

「そうだよ。やっぱり、あたしたちには上野辺りが相応しいのよ」

話がまとまったところで、二人は銀座駅から地下鉄に乗って上野広小路駅へ向かった。

広小路駅を出たところで不忍池の方に向かい、不忍通りの一本手前の仲町通りに入った。

両側に飲み屋ばかりが延々と建ち並ぶ通りである。

適当な店を探し歩けばいつまでも切りがないと思ひ、二人は広小路から入ってすぐの縄暖簾の下がった居酒屋に入った。

店内に入り、案内されたテーブル席に着くと、啓司はビールとつまみを何品か頼んだ。程なくしてビールが運ばれてきて、二人は互いのグラ

スの縁と縁とを触れ合わせて乾杯した。

「啓司くん、お誕生日おめでとう！」

「ありがとう」

こんなふうに誕生日を祝ってもらうのは初めてのことだったかもしれない。啓司の家ではついぞそんな習慣はなかった。

この日、啓司は少し飲み過ぎたようだった。店を出て不忍池の方に向かう途中で、急に吐き気が込み上げてきた。吐き気を堪えながら、不忍通りを渡り、水上音楽堂脇の暗がりへ駆け込んだ。静香が慌てて啓司の後を追ってきた。啓司は灌木の茂み近くで前屈みになると、胃の中の物を盛大に地面にぶちまけた。静香は心配そうに啓司の背をさすりながら声をかけた。

「啓司くん、大丈夫？」

そして、バッグからハンカチを取り出すと、それで啓司の口元を拭いた。

そんな静香の優しい顔を間近で見つめていると、啓司の中にある衝動が込み上げてきた。啓司はそれを抑えきれなくなつて、静香の背に腕をまわして身体を引き寄せ、両腕で強く抱き締めた。自然と二人の唇と唇が重なり合った。

「……啓司くん、臭いよお」

程なくして身体を離れたとき、静香は顔をしかめてそう言った。

(つづく)